

【第3回滋賀県立高等学校在り方検討委員会 開催概要】

1 開催日時：

令和8年7月10日（金）9時30分～11時30分

2 開催場所：

滋賀県庁 東館7階 大会議室

3 出席者：

〔会場出席〕 14名

生駒委員、太田委員、加藤委員、門田委員、岸田委員、
小玉委員、炭谷委員、立岡委員、中井委員、中野委員、
永浜委員、福永委員、安田委員、森下委員

〔オンライン出席〕 3名

蒲生委員、朝比奈委員、竹林委員

〔事務局〕

村井 教育長、上田 教育次長、岸村 教育次長、
武原 高校教育課長、浅岡 魅力ある高校づくり推進室長
教育委員会事務局各課、知事部局関係課



4 開催概要：

（1）新任委員の紹介

（2）報告

① 文部科学省・令和7年度「産業イノベーション人材育成等に資する高等学校等教育改革促進事業」の採択状況

② 部会での議論の状況

- 「普通科高校等部会」での議論概要
- 「産業教育部会」での議論概要
- 「多様な学習ニーズ部会」での議論概要

(3) 協議「(仮称) 滋賀県における高等学校教育と県立高等学校に関する将来ビジョンの策定に向けた考え方について」

委員からの主な意見

◆ どんな教育が提供できるか、そのためにどのような学校が必要とされるか

- 従来の教育は一方向に全体を導くものであったが、現代社会においては個人の差異を前提とした教育が求められている。個別最適な学びを真剣に実現しなければ、多様なニーズに合わない者が取り残されることになる。失敗を恐れず挑戦できる安心で居場所づくりは重要であるが、容易ではない。野洲高校の取り組みは個別最適の方向性を示すものであり、地域や大学との連携も個別最適な学びの実装に資する議論であると捉えられる。
- 大学側から見ると、高校で手厚く個別最適化された支援を受けてきた生徒が、大学に進学すると急に手厚いサポートを受けられなくなる現状がある。大学では自ら支援を求めなければならず、多くの生徒が適応できず退学に至るケースも少なくない。特に小規模学部では支援体制が追いついておらず、多様なニーズに応えることが難しい。さらに、高校で専門性を高めても、大学では初年次に専門的な学びが乏しく、高校の専門性が活かされにくい。加えて、高校で質の高い PBL（課題解決型学習）が実施されているにもかかわらず、大学の PBL の質が低い場合もあり、高校と大学間で教育内容に乖離が生じている現状がある。
- 大学では、専門性の高い人を対象に専門学校や他大学からの編入生を受け入れている。高校で身につけた専門性を生かして直接大学の対応分野に進める仕組みがあれば良いと考える。

◆ 各地域に役割・特色を持った学校をどう配置するか

- 単位の互換性が確保され、他の高校でも単位取得が可能であることは極めて有益である。県立高校の全リソースを有効活用できるためである。これを実現するには校内

の ICT 基盤の充実が不可欠である。生徒が単位取得のためだけに他校に通うのは非現実的であり、オンラインでの連携が望ましい。そのため、県立高校では生徒一人に一つのグループアカウント等を付与し、全校がオンラインで繋がる環境を整備すべきである。

- 高校選びにおいて、偏差値などの数値による選択が一般的であるが、それだけではなく地域性や学校の特色を示す軸が必要である。例えば、彦根エリアは精密工業、高島や甲賀、東近江は森林資源や水源といった地域特性があり、それに基づく体験やプロジェクトへの参加機会がある。全員が参加するわけではないが、学びの内容や文化、スポーツなどの特色をわかりやすく示す色分けのような指標があれば、偏差値に加えて滋賀らしい魅力を伝えられると考えられる。
 - 学校の特色を明確に打ち出し、「尖った」魅力を発信することが極めて重要であると考えている。それにより、「この学校ならこうした学びがある」とすぐにイメージできる戦略が求められる。ただし、高校教員は保守的な傾向が強く、新しい取り組みに慎重な場合が多いため、教員文化の再構築が必要である。特に校長の裁量権拡大や、人事面で特色ある高校の教職員を長期間配置し、一丸となって特色を創り上げる仕組みを公立高校にも導入すべきである。
 - 特色ある学校づくりは重要であるが、保護者の視点からは、魅力的な学びがあっても通学が現実的に困難であれば選択されにくい。よって、選べることと同時に通える学校であることも現実的に重要である。特に長浜地域のように冬季の積雪や交通の便が良くない場合、三年間継続して通えるか、通学時間や交通手段も考慮した配置が求められる。
 - 各地域の特色ある学校配置は非常に有意義であると考え。しかし、これまでの議論では高校生の視点が十分に反映されておらず、大人の考える良さと高校生の望むものとの乖離が存在する。その乖離が大きくなるほど、大人の負担が増すため、高校生の考えと大人の認識の差分を明確にし、議論を深めるべきである。
- ◆ 学校活力を維持するための学校規模の考え方をどう整理するか
- 生徒の特性に寄り添った学びの在り方は重要であり、各学校は自校の特色や多様な学習形態を明確化すべきである。特に個別最適な学びに関しては、保護者の誤解を避けるために、具体的な教育内容や支援体制を公表することが必要である。例えば、小集団での課題別クラスやスクールカウンセラーの利用など、可能な範囲での支援内

容を示すべきである。ただし、その前提として物理的・人的環境の整備や専門性の高い職員の配置が不可欠であり、生徒や保護者の思いのズレを解消し、納得の上で学べる環境づくりが求められる。

- 2040 年の滋賀県の将来像を踏まえ、育成すべき高校生の姿を明確に定義することが必要である。普通科・工業科・総合学科それぞれで育てたい人材像を学校教育を通じて示すべきであり、さらに高校教育を通じて目指すべき県の姿も示されるべきである。加えて、今後の変化が予測困難な時代においては産業界との連携が極めて重要であり、その仕組みや支援体制についても十分に検討する必要がある。
- 失敗を恐れず挑戦できる安心できる居場所の確保は非常に難しい課題である。失敗は怖いものであり、大人や保護者も失敗を避けさせたいと考えがちであるが、失敗を「うまくいかない方法を見つけた」と捉えるエジソンのような考え方を育む教育や大人の姿勢が重要である。同年代の挑戦する高校生の姿や、それを支える学校・教員・保護者の姿勢を全校で共有し、挑戦しやすい環境づくりをさらに深める必要がある。

(4) 次回開催日程について

- ・ 第 4 回の開催日程については、9 月で開催を検討。
- ・ 具体の日程については改めて調整する。

5 その他（職務代理者より）：

- 各部会においては、以上のたたき台を基により具体的な提案を行い、次回の第 4 回委員会では県民や地域の方々から意見を得られる素案とするための議論を進められたい。
- 事務局においては、本日の議論およびこれまでの会議・部会の論点を整理し、各部会および次回会議に向けた意見集約を行うとともに、会議終了後速やかに各部長・部会員との日程調整および第 4 回会議の日程調整を進められたい。